日本手話の「来る」の分析

今里典子*

An Analysis of ‘come’ in JSL

Noriko IMAZATO*

ABSTRACT

Motion verbs have drawn the interest of researchers as sources of grammatical elements resulting from grammaticalization. Ichida (2005) pointed out that the JSL motion verb [kuru (come)] has a usage as an auxiliary verb expressing highly probable conjecture, but it does not reflect the process of grammaticalization. By analyzing [iku (go)] as the second verb of serial verb constructions (SVCs), Imazato (2009, 2010, 2016) elucidated that [kuru] shares basic usage with [iku] while it does not share highly grammaticalized usages: but Imazato did not provide a complete overview of [kuru] usages. The purpose of our research therefore is to show how [kuru] has various extended usages by analyzing the JSL western dialect data. Our practical study reveals five distinct usages, and concludes that the most semantically bleached and phonetically reduced usage has established a grammatical element because of the condition of SVC that facilitates grammaticalization.

Keywords : JSL, serial verb construction, grammaticalization, motion verb, metaphorical extension

1. はじめに

日本手話（Japanese Sign Language，以下 JSL）西日本方言の分析結果から，［行く・来る］（以下 JSL の語は本文中[　]表示）には空間移動以外にも様々な用法が発達していることは，関連する先行研究，今里(2009, 2010, 2016)[(1)(2)(3)]で指摘されている．どちらの動詞も連続動詞構文（Serial Verb Construction，以下 SVC）である V1+V2 の V2 の位置に現れて「様態」および「目的」用法を表す．さらに［行く］は，同じ SVC 環境で非常に文法化の進んだ「勧誘（cohortative）」および「命令（imperative）」用法を発展させている．しかし［来る］は，命令用法としては非常に限られた数の動詞を V1 とする例外的な場合しか現れる事はできず，勧誘用法は存在しないことを今里（2010）は指摘する．つまり［来る］の文法化は，［行く］と比べて非常に厳しく制限されているように見える．一方市田（2005）[(4)]は，［来る］に「確実性の高い推量」を表す文法化した助動詞用法が存在すると指摘する．しかし残念ながらこの用法の存在を確定する分析過程が全く示されていない．

そこで本論は，JSL の移動動詞［来る］について実例を集めて分析し，意味の広がりを明らかにし，様々な用法が拡大する環境条件について議論することを目的とする．第２章で［来る］の助動詞としての用法に関する市田（2005）の主張を見た上で，第３章では本論で分析するデータの種類について説明する．第４章では，［来る］の基本を解説した後，撮影された様々な例文を音韻・文法的振る舞い・意味の面から分析し，［来る］には 5 つの意味・用法：「具体物接近」・「出来事接近」・「直示」・「目的」・「予測」が観察できるが，その内予測用法は，最も文法化が進んでいる場合にモダリティーを表す文法要素となっていることをその道筋とともに明らかにする．最後に第５章で，［来る］の分析結果をまとめ，JSL において文法化を育む環境として，動詞連続が重要な役割を果たす可能性を議論し，今後の課題についても述べる．

なお，本研究で JSL の文を表記する場合には，以下の記号とルールに従い文を記述している．本文内では手話単語は［手話］のように括弧でくくる．通し番号のついた例文内では手話単語は相当する日本語で示し，動詞語幹に包入される名詞要素を表す手の形である類

*　一般科 教授

辞（classifier，以下 CL）は，［人］のように括弧でくくる．動詞については，空間動詞では［動詞 f-s］のように移動の始点と終点を，一致動詞では［x 動詞 y］のように動詞の前に主語と後ろに目的語の位置をそれぞれ示す．但し，s はサイナーの位置，f はサイナー前方の離れた位置，x と y はそれぞれサイナーの利き手側と非利き手側の位置を示し，u はデフォルトの位置より上，d は下であることを意味する．口型はカタカナで表す．また（　）でくくられた語は省略可能であることを示す．

2. 先行研究における[来る]の分析

JSL を対象とした文法化の視点からの最も先進的な研究の一つが市田（2005）である．その中で［来る］を取り上げ，文法化が進んだ結果としての用法が，他のいくつかの手話単語（例えば［規則］等）の同様の用法とともに，相互に時に重なり，あるいは補い合ってムードやアスペクトを表す助動詞のグループを形成していると指摘している．そのうち［来る］に関わる主張をまとめると，JSL の［来る］には動詞の直後に現れて文法化した助動詞として機能する用法があり，確実性の高い推量（～に違いない・～はず）を意味するという．しかし詳細な例文の分析や文法化のプロセスは示されていないので，JSL においてどのようなプロセスで文法化が起こったと考えられるか，文法化が起った環境はどのようなものか，文法化した用法は機能語（助動詞）と考えてよいのかが実証的に明らかになっていない.（なお市田は音韻弱化の問題点についても議論しており，重要な課題ではあるが本論では立ち入らない.）そこで本論では，JSL の動詞［来る］にどのような用法があるのかを実例に基づき記述・分析し，［来る］の各用法がどのように拡張したのかを詳細に観察する．

3. 取り扱う JSL データ

JSL は，サイナーの失聴時期・生育環境等による個人差が大きい．さらにサイナーの居住地や聾学校毎のいわゆる地域差，そして世代間の違いも表現に大きく影響する．また書記体系を持たないため，文法化のプロセスに関する研究に本来必要な歴史的データが圧倒的に不足している．そこでこのような JSL の特徴によるデータのばらつきを減らし，歴史的データ不足を補う必要がある．まずサイナーの失聴時期・生育環境・地域方言差・世代格差を最小にする為，分析する手話データを，デフ・ファミリーの中で手話を見て育ち，関西の聾学校出身で現在関西在住の西日本方言を使用する聾者から提供を受けることとした．年齢は現在 40～60 歳代で，言語習得過程を通じてメールや SNS 等の日本語の書き言葉に日常的に触れていない．またこの世代は 60～80 歳代の親や親の友人，祖父母等と手話によるコミュニケーションが問題なくでき，かつ子供世代の若いサイナーの手話も理解するので，高齢者の手話と現在の手話の違いについてよく理解している．手話表現については 40～60 歳代のサイナーに，与えられた様々なシチュエーションで自分なら日常的にどう表すかを考え自由に自発的に発せられた表現を撮影した．また 70 歳以上のサイナーによる古い手話データがある場合はそれも分析対象とするが，40～60 歳代の手話と差がない場合は特に言及しない．またインタビューで語られた表現に関するコメントも参照する．

4. ［来る］の意味・用法

4.1 ［来る］:具体物接近 JSL の移動動詞「来る」は，JSL 動詞の３分類のうち，いわゆる空間動詞に分類される語で，その手の形は人差し指１本をのばして下向きにした指差しの形で，はじめに移動主体が移動を開始する位置（始点）を指差し，サイナーの方向を目指し最終的にはサイナーの位置（終点）まで移動する．そして人やものなど具体的な対象がサイナーの位置にに接近あるいは到着するという意味をあらわす．なお，例文内の PT（Pointing）は指差し表現をあらわし，PTf は f の位置を指差す事を示していることを断っておく．

(1) 犬　(PTf)　ここ sd　来る f-s
　（その犬が私のところに来る）
(2) 友人　(PTf)　PT1-家 s　来る[人] f-s
　（友達が私の家に来る）

例文(1)の［来る］は，はじめは手話空間内のデフォルトである胸の高さの「犬」のいる位置 f にある手が，そこから直線的に普通の速度でサイナーの位置 s まで移動することで表現される．手の形について言えば，例えば人間である［友人］が主語の場合は，(2)のように人差し指の指先上向きの［人］を意味する CL の形にして動かす事になる．他にも［男］や［女］，複数を表す［2］のような数，さらに物が主語の場合は ［自動車］等を表す手の形が CL として動詞に包入され，移動主体の種類・数・性別などについて詳細化する．その手の動きは，速度のみならず，移動経路の形状（ジグザグ，上り，カーブ等）や様態（滑らかに，弾むように，ゆっくりと等）を反映できる．

4.2 ［来る］:出来事接近 ［来る］の主語が，4.1 で見た具体的な「人やもの」から抽象的な「出来事やその日時」に変わると，比喩を介して意味が拡大し，出来事の予定が近づくという意味を持つようになる．この時 JSL では主に３つの表現方法が想定される．まず，［来る］を述語とする例としては，例えば幼い子供がクリスマスを楽しみに待っていて母親に「もうすぐクリスマスが来るね」と確認する場合に可能な表現である．

(3) a. クリスマス　来る fu-s　(PT)
b. クリスマス　来る[人]fu-s
（クリスマスがくる）
c. *12 月 25 日　来る fu-s
（12 月 25 日がくる）

このタイプの例文が容認される場合，手の形は下向き指差しの形，または［人］の CL のどちらかのみであるが容認度には個人差がある．手の位置はデフォルト位置より少し高い頭の高さの前方位置が移動の始点，終点が s で，手の動きは直線的にゆっくり降りてくるような動きで，移動の経路や速度のバリエーションは反映できない．そして(3b)を容認するサイナーにとっての動詞に含まれる CL の指示対象，さらに動詞に CL を含まない(3a)のみ容認するサイナーにとっての文末 PT の指示対象をたずねると、サンタクロース，あるいはサンタクロースを含む抽象的なクリスマスという出来事を指示すると言う．つまりこの［クリスマス］は厳密には「12 月 25 日」という日時ではなく，その日に起こる「出来事（の内容）」を意味している．実際具体的な日時を主語にした(3c)は容認されず, 普通は次のような［(時間的に）近づく］や［(時間的距離が）縮む］などの動詞を使って表現される．

(4)　正月　迫る fu-su　　（正月がやって来る）
(5)　海の日　縮む fu→su　　（海の日がやって来る）
＜夏が大好きで休みを楽しみにしている場合＞

出来事や出来事の日時が接近することを表す最も一般的な方法の 1 つは(4)のように，［迫る］という動詞を使う事である.「迫る」では両手を，5 指を伸ばした指文字の「テ」と同じ形である「テ手形」を掌を迎え合わせの方向にして, 片手は顔の前方の離れた位置 fu, もう片方は顔のすぐ前 su に置いて，fu 位置の手を su 位置の手に近づけることで表す．これを簡素化した形として顔の前の手は省略し，fu 位置の手形のみをサイナー方向へ動かす事でも表現出来る．位置 fu にある手の形が予定される日時・出来事を指示しており，これがサイナーの方に動くので,「予定の出来事・日時が自分の方に迫って近づく」という意味になる．

もう 1 つの一般的な形は, (5)のように距離が［縮む］を意味する，両手共に OK のジェスチャーで伸ばしている 3 指を握り込んだ形にして，片方を顔の前方の離れた位置 fu に，もう片方は顔のすぐ前 su に指先同士を向き合わせておいて，両手を互いに近づける表現である．こちらは予定されている出来事やその日時にサイナーの方から近づいて，予定に積極的に関与を希望する，あるいは待ちこがれるのような場合に使用する傾向があるという.［迫る］と［縮む］は予定日時を主語に取る事ができ，サイナーに予定の時間が接近することを表している．一方［来る］では，(3c)で見たように予定日時は主語に取れず、(3a)(3b)のように出来事のみを主語にとることから，時間の接近よりも，出来事自体の実現を意味していると考えられる．

予定する出来事の予定日が近づくという意味を表す場合には，少なくとも調査対象となった世代のサイナーは，(4)(5)で見た表現がより自然で一般的な表現であり，(3a)(3b)のような例は若い世代でより一般的だと証言する．また 70 代のサイナー 1 名はどうしてもこの(3a)(3b)は容認できないと主張した．今回調査した世代においては,［来る］のこの用法は，存在し，見て理解はできるがそれほど生産的ではないといえる．さらに(3)に見られる［来る］は他の動詞 V1 と連続した V1+V2 の SVC の環境で V2 として表れることはできないことも指摘しておく．

4.3　直示用法　4.2 の意味を持つ［来る］は SVC の V2 としては表れることはなかったが, 4.1 で見た具体物を主語とする［来る］は，V1+V2 の順に他の動詞 V1 と共に表れ SVC を構成する場合がある.［行く］と同様に,［来る］はこの構造で直示用法を表現できる（この用法は先行研究の今里（2010）や Imazato（2016）等では様態用法と呼ばれる）．この時 V1 には,［走る］や［歩く］等の様態動詞が広く選択される．JSL の様態動詞の多くは，手形の移動を含まない無変化動詞なので，単独では移動方向を表現できない．そこで V2 の［来る］で対象移動はサイナー方向であることを表すことによって直示を表現している．このような［来る］には，辞書形である下向き指差しの他，多様な CL の包入が可能で，手の動きには様々な様態，経路を自由に反映する事ができるなど, 4.1 で見た用法と極めて類似している．

4.4　目的用法　様態以外の V1 と SVC をなす V2 の位置に現れる［来る］は,［行く］とは移動方向が異なるだけで全く同様の目的用法を表現ができることが，例えば今里 (2010) 等にも既に詳しく述べられているので，ここでは簡単に説明するにとどめる．

(6) a. 友人 f　食べる　来る f-s　(PTf)
（友達が食べに来る）
b. PT1　食べる　行く s-f　(PT1)
（私が食べに行く）

［来る］の手の移動の終点は s に決まっているが，始点は自由に指定が可能で，直示用法より制限はあるものの［人］などの CL を包入でき，動詞は移動の意味を保持してもいる．但し手の動きが経路や速度等の様態を反映することはないことが 4.3 の直示用法とは異なっている．

4.5　予測用法　4.2 の出来事接近を意味する［来る］が生産的でなかったのとは対照的に，どの世代のサイナ

ーにとっても慣れ親しみのある用法として，市田（2005）が指摘した用法がある．この指摘は主に東日本で使用される表現の観察結果と推測されるが，西日本方言でも一般的でよく見られる表現である．本論では西日本方言に見られる相当する，あるいは類似の用法を予測用法と名付け，コンサルタントから得たデータの分析を試みる．

(7) a. 事故　来るウ
　b. 事故　起こる　来るウ
　（事故がおきることになるだろう）

典型的例として(7a,b)をあげる，アドバイスに反して危険運転を続ける友人に対して発せられる表現で，どちらも同じように「（事故という）出来事が近づいてきて近々実現するだろう」という意味を表している．(7a)の［来る］はこの節の述語動詞であり機能語ではない．出来事は近づいてくるだけでなく実現するだろうことをサイナーは予測している．(7b)では出来事の実現はV1 で表され，V2 は市田が指摘するように予測の意味を加えていると考えられる．

4.2 で見た出来事接近の表現とこの用法は，どちらも出来事を主語に取り，かつ表す意味も関連している．一方最も大きな相違点はまず音韻である．［来る］が出来事接近を表す場合，指差しの手の形は，デフォルト位置より高い位置前方から s 位置へと直線的にゆっくり動かされる傾向があった．しかし予測用法では，指差しの形がその指先で，サイナーの体の前方にサイナーの利き手側上から非利き手側下へ斜めに横切る線を描くように非常に素早く短く動かす動きで表される．

文法の面では，予測用法にのみ，動詞の行為が未発，つまりまだ起こっていないことを示す口型ウが動詞［来る］と共起が義務的で，ないと非文になるという．また多くの例で来るべき事態が起こる時期を示す「これから，今後，～年後，後で，将来，今度」などの副詞が伴われる．JSL の時制は通常このような副詞表現によって明示されるので，例文の時制は未来である．また出来事接近の［来る］は SVC のような複雑な構造を取ることはできなかったのだが，予測用法では (7b)のように SVC の文が可能である．

但し実際の予測用法のデータを注意深く観察すると，2 つの動詞が並んでいてもそれらの構造は一様ではない事がわかる．2 つの動詞の間に，主語の「指差し(PT)」のような手指による語や，「頷き(N)」，「間(m)」などの非手指標示が観察される例が少なくない．これらはいずれも節末標示機能を持つ．さらに口型パのように出来事の完了を表す非手指標示も見られる．このような現象は直示用法や目的用法の SVC では見られなかった特徴である．予測用法の述部は実際どのような構造を持つのだろうか．並列する動詞の間に節末標示機能を持つ要素の有無に着目して整理する．（なお紙面の都合上２行にわたって記述している場合でも，以後[～]記号の前後は滑らかに続いており，例文はまとまった１文であるとする．）まず，２つの動詞の間に別要素が入る例がある．

さて，以下の例(8)は，「歌が上手な自分の娘 y が歌手になり，人気が出てきつつある」という状況が与えられた時に自発的に表現された文である．

(8)　将来　PT1　家 s　yu 与える sd　<u>PT1</u>　～
　来るウ　m　待つオ
　（将来私は（娘 y から）家をもらうことになるだろうと
　楽しみに待っている）

［与える］の後に現れる下線をほどこした節末標示の［<u>PT1</u>］により区切られ，前半の部分が「私が家をもらう（こと）」という意味のひとつの単位となり，文全体の述語［来る］の主語になっている．この場合 PT1 はいわゆる名詞化辞としての機能を果たしていることがわかる．

次の(9)の口型パは，到達・達成動詞と共起してその述部が示す行為や出来事が完了した事を表す．出来事は一旦終了するので，［パ］出現後に別の動詞（V2）が続いて全体として V1+V2 の SVC を作らないが，自発的表現として以下のような例が見られる．

(9) 問題　なくなるパ　来るウ
　（問題が解決してしまうことだろう）

これらの観察結果から，(8)(9)の［来る］を含む表現における，一見 V1+V2 の連続動詞に見える部分は，実は１つの述部を構成していないことがわかる．最後の動詞［来る］の前の部分は“いわゆる名詞節”と考える事ができ，このような［来る］は本動詞であり補助動詞や助動詞ではない．しかし以下の例(10a)(11a)は異なる振る舞いを見せる．

(10) a. ビル d-u N　完成する　　来るウ
　b. ビル d-u N　完成する　m　来るウ
　（ビルが完成するようになるだろう）
(11) a. 男 a　泣く　来るウ　PTa
　b. 男 a　泣く　PTa　来るウ
　c. *男 a　泣く　PTa　来るウ　PTa
　（男が泣くことになるだろう）

自発的な発話で得た(10a)(11a)の 2 つの動詞の間には，一切の要素はなく SVC をなしていることは明らかである．ところが(10a)の 2 つの動詞の間に「間」をおいて表現できるかどうかテストしてみると，(10b)のように全く違和感なく許容され，a と b で意味も変わらないという．また (11b)のように２つの動詞の間に PT が

あっても非文にならない．但し文末と２動詞の間の両方に付けた場合には，冗長であるという理由で容認されない．既に見た(7a)(8)(9)(10b)(11b)では［来る］は文の唯一の動詞だが(7b)(10a)(11a)では SVC の V2 として現れる．V1 と結びつき補助動詞となっている可能性もある．（市田が指摘した「確実性の高い推量を表す助動詞」とは，この V2 に相当する．）

さて，上記のような予測用法の振る舞いをどう説明するべきだろうか．興味深いのは(10)(11)の例が示す通り，これら二つの表現は並び立つという事実である．

(12) a. 男 x　アメリカ　行く[飛行機]s-ux　～
　　m　来るウ　PTx
　b. ?男 x　アメリカ　行く[飛行機]s-ux　～
　　来るウ　PTx
　　（彼はアメリカに行く事になるだろう）

自発的表現例(12a)と，作成例(12b)はほぼ同じ意味を表すことができる．但し［来る］の前に「間」がない(12b)より，［間］がある(12a)のほうが好まれる．［来る］の直前の動詞が［行く］のような移動動詞である場合，これら2つの動詞を［間］をあけずに表現すると「行ったり来たりする」という意味を表すと誤解される可能性があるので，［間］を入れるほうが良いと説明するサイナーがいる．(10b)(11b)のように特に誤解の恐れがない時には，2 つの動詞の間に「間」や「頷き」等の要素は必要なく，容易に脱落する事で(10a)(11a)が得られる．

この状況を理解する鍵は「文法化」にある．人・ものの移動を表す動詞［来る］は，SVC の環境で，直示用法と，後に目的用法を発展させたと考えられる．この順番は動詞に CL を包入する可能性と，手の移動が様態を反映できる可能性が，いずれも目的用法のほうがより厳しく制限されること等から推測できることはすでにわかっている．さて，4.1 で見た具体物接近の意味から 4.2 で見た出来事の接近へは具体から抽象への比喩を介して意味が拡大することで得られる．［来る］は，(8)のように節の形で表現される複雑な出来事を主語とすることができる．また(11a)の例で，節末標示の PT は誤解を生む恐れさえなければ容易に省略される事実を見た．PT が省略されても「頷き」・「間」のような非手指表現があるが，これらも(10a)のように省略の対象となりやすい．これらの要素が省略されると物理的に隣り合う動詞が SVC であると再解釈される．その際 V2 の位置にある［来る］は，V1 と結びついて V2 の出来事の実現を予測するようなサイナーの判断を表す補助動詞と認識され，予測用法の［来る］が確立していると考えられる．［来る］が出来事接近，次に予測用法の順に確立されたであろうことは，出来事接近の表現よりも予測用法の方が短く素早く表現され音韻的に簡素化が進んでおり，且つ元々あった「移動」の意味が失われ漂白されている事から十分推測できる．ある語の文法化は，特定の環境下で繰り返し使用されることで，その語彙要素が文法的機能を表す要素へと一方向に変化していくという，Heine ら(1991)[5]提案の一方向仮説，さらに JSL において「行く」や「見る」等の動詞も SVC 構文の環境で文法化する（今里 2014）[6]という事実を考え合わせると，JSL の「来る」も SVC 環境で文法化するという主張は妥当であると考えられる．また今回，特に若い 40 代のサイナーの方が，「頷き」や「指さし」がない表現を好む傾向も文法化を暗示する．

ここで［来る］の出来事接近と予測の意味の違いを確認しておく．例文訳からわかるように，出来事接近は単に出来事が近づいている事を述べている．一方予測用法は出来事実現の「予測」を意味する．サイナーが出来事実現性をどう判断するかに注目した表現なので，結果予測の余地がない場合にこの用法は使えない．

(13) a. *５年後　医者　（成る）　来るウ
　b. ５年後　医者　成るウ
　　（５年後医者になるだろう）

例えば現在医学部１年の学生が「５年後医者になるだろう」という単純未来の意味で(13a)は容認されない．現在医学部１年生は順当にいけば５年後に医者になるのは規定通りで，わざわざ何らかの予測をする余地がない．順当な結果の場合には(13b)のように［成る］で止めるべきで［来る］の使用は不適切である．順当な通常ステップを踏んで徐々に変化する出来事は，その変化を見ていれば結果は自明で予測の必要はない．例えば手話を指導中の今はまだ上手でない学生のセンスや努力を知った後，以下の例を表現する場合を考える．

(14) a. 将来　PTf　うまい　来るウ　PTxf
　b. ???将来　PTf　進歩する[男]d-u パパパ　～
　　来るウ　PTxf
　　（将来あの人は上手になるだろう）

(14a)では今は「下手」だが，将来「上手」な状況が実現するだろうと予測している表現である．(14b)の動詞「進歩する」には，「段階的に，徐々に」という意味を付加する副詞表現である口型パパパが付帯する．この口型付きの V１と［来る］は共起しにくい．徐々にレベルが上がっていく様を見れば当然「うまく」なることは明らかで，わざわざ予測用法は使わない．また以下の(15a)で見るように，予測に反するような「思いがけず・意外にも」という意味を表す副詞の口型ポが［建つ］に共起すると例文は決して容認されない．

(15) a. *建物　建つポ　来るウ
　b. 建物　建つ　来るウ
　　（建物が建つだろう）

比喩的拡大を↓，文法化を⇒とすると，JSL［来る］の意味・用法の拡張は(16)のようにまとめられる．

(16) JSL 動詞［来る］の意味・用法の拡大

V		SVC		SVC
具体物接近	⇒	直示用法	⇒	目的用法
V ↓		SVC		
出来事接近	⇒	予測用法		

5. まとめ　今後の課題

JSL の西日本方言の分析から，動詞［来る］が，比喩的拡大と SVC 環境における文法化という２つの方法でその用法・意味を拡大していく道筋が明らかになった．［来る］には SVC 環境下において文法化が非常にすすんだ用法があることを見た．最も基本的な意味である「具体物接近」は， SVC の V2 として，音韻の簡素化・意味の漂白とともに直示用法，さらに進んで目的用法を確立することはすでに示されていたが，その文法化の道筋とは別系統の拡大として，具体から抽象への比喩を介する事により，「出来事接近」の意味を表現するようになる．このとき主語は“いわゆる名詞節”で表現される出来事でもよい．いわゆる“名詞節”を作る為に，日本語における「こと」や「の」のような，“節”の名詞化を決定づける要素は必須であるが，JSL では “節”が名詞と同等であることを示す名詞化辞として機能する節末標示の PT は必須要素ではない．この PT が省略されると，非手指表現として「間」や「頷き」が表れていたとしても，SOV 言語である JSL では，もともと PT の前にある主語の“節”内の最後の動詞と，文全体の述語である［来る］が手指表現として並列するようになり，その結果，手指表現として隣り合う２つの動詞は SVC を形成していると再解釈されるようになる．そしてこの SVC という環境の中で文法化が起こると考えられる．さらに文法化が進んだ先では，西日本方言でも予測用法が補助動詞の役割を果たす可能性があることを見た．

またインタビューで，現在 70 歳代のサイナー１名は子供時代に予測用法を使用していた事をエピソードとともにはっきり覚えている事を証言した．また 60 歳代のサイナー達によると，予測用法は親世代も使用しており確かに昔から存在していたが，自分たちの世代では徐々に使用頻度が増え，若い世代は自分たちよりもさらによく使うようになっていると感じると証言する．確かに調査に協力して下さった世代の中でも比較的若いあるサイナーは，通常 2 つの動詞 V1+［来る］の間に「間」や［指差し PT］を挟む事は可能だが挟まない方が自然に感じると証言した．より若い世代で予測用法が使いやすくなっているこの状況も文法化を示唆していると言えよう． JSL のように歴史的なデータが残りにくい言語では，言語の時間的変化を捉える為に，世代を区切った分析が有効である可能性も指摘しておきたい．

最後に，動詞と共起する口型ウの働きについての詳しい分析がこれから必要になると考えている．JSL において，ある語が文法化し機能語を生み出す背景には，SVC と共に，決まった口型が伴われる事実は既に観察されている（今里（2009, 2010），Imazato（2016）他）．今回の JSL の西日本方言の［来る］でも，文法化が非常に進んだ用法成立には口型ウが必要である事を指摘した．手話言語に特徴的な口型が文法化において果たす役割や，音声言語の文法化プロセスとの関連を明らかにすることは，今後の課題である．

謝辞

本研究は，コンサルタント，研究協力者としての JSL サイナーの協力なしには進める事は不可能であった．データ撮影に際してご協力いただいた方々は，今泉友幸，髙田英充，髙田順子，田中元三，馬場博史，藤井孝子，前川和美の諸氏である．コンサルタントの方々にはデータ撮影のみならずネイティブ・サイナーとして有益なコメントも与えていただいた．ここに心よりの感謝を表したい．なお論文に残る不備はすべて筆者の責任である．

本研究は，科学研究費補助金基盤研究(B)「移動表現による言語類型：実験的統一課題による通言語的研究」課題番号：15H03206（研究代表者：松本曜），科学研究費基盤研究(C)「日本手話の動詞連続について」課題番号：15K02551（研究代表者：今里典子）の支援を受けている．ここに心よりの謝意を表する．

参考文献

(1) 今里典子：「日本手話の連続動詞構文」，神戸高専研究紀要 No.47，pp.135-140，2009.

(2) 今里典子：「“行く・来る”を含む連続動詞構文：日本手話／日本語対照研究」，『ことばの対照』，岸本秀樹（編），pp.15-26，2010.

(3) Imazato, Noriko, “Japanese Sign Language Syntax”, Handbook of Japanese Applied Linguistics, Minami Masahiko (ed.)，pp.483-510，2016.

(4) 市田康弘：「手話の言語学(11) 文法化　日本手話の文法(7)「助動詞，否定語，構文レベルの文法化」，『月間言語』34(11)，大修館，pp.88-96，2005.

(5) Heine, Bernd, Claudi Urlike, and Friederike Hünnemeyer “Grammaticalization: A Conceptuαl Framework”, Chicago, London: University of Chicago Press. 1991

(6) 今里典子：「日本手話における主語／目的語標示の助動詞について」，言語研究 146，pp.31-50，2014.